

東京バッハ合唱団 月報

[第754号] 2025年4月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp



BACH-CHOR TOKYO

Monthly Newsletter No.754

April 2025

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

大村恵美子、最終指揮（第123回定期演奏会 5/31、6/7）

いよいよ 最後の本番指揮です

日本の土壤にバッハ・カンタータの種を撒き、今日のバッハ音楽隆盛に多大な貢献を果たした、当合唱団主宰者・大村恵美子が、来る5月、6月の公演をもって一線を退くこととなります。

大村恵美子は、ストラスブール大学と同音楽院への留学を終えて、1962年帰国、6月に東京バッハ合唱団（当時は「バッハ合唱団」）を創始、以後63年間の長きにわたって、この合唱団を指導してきました。

1979年からは、小林道夫氏に替わって、本番指揮の重責も担いながら上演活動をつづけ、多くのカンタータ愛好家を生み出すとともに、協演者の中からバッハ専門の声楽家や器楽奏者を世に送り出してきました。わが国でのバッハ合唱曲、とくに教会カンタータの受容と紹介に、少なからぬ貢献を果たした音楽家のひとりと言っても許されるでしょうか。

この3月に本人が満94歳を迎えたことは、月報でもなにか報じました。驚異的な健康体と寿(ことほ)いでも頂きますが、さすがに体力や記憶力にはそれなりの衰えが感じられるようになり、「ここらが潮時」という本人の判断です。

自他ともに、うかつにも、永遠の現役を疑うことがなかったものですから、後継指揮者の育成など、世代交代の環境整備が遅れました。世に合唱指揮者は多数いらっしゃいますが、バッハのカンタータを知り尽くすだけでなく、それを日本語で上演することに情熱を感じてくださる指導者・指揮者となると、一朝では見出せません。

さいわい、昨年の特別演奏会「バッハと仲間の音楽会」（2024年6月、荻窪教会/三崎町教会）で、自身の大作「キラキラ星変奏曲」の見事な上演に際し、指揮者としての実力も存分に証明してみせた、当合唱団ベテラン団員の松尾茂春氏に、当面の練習指導を引き受けていただくことになっています。

松尾氏は、当合唱団の創設15年目の1977年に入団、爾來今日にいたるまで、ドイツ演奏旅行や国内巡演をふくむほぼすべての企画に参加し、大村恵美子の薫陶をたっぷりと受けながら、みずからも半世紀に近い合唱団の伝統を築き上げた功労者の一人です。ご自身の所属教会や地元合唱団での指導や公演指揮では、多くの実績を積みあげていらっしゃいます。団員一同、当

東京バッハ合唱団 第123回定期演奏会

— 日本語演奏・大村恵美子訳詞 —

カンタータ第23番《主なる神 ダビデの子》

カンタータ第34番《おお永遠の火よ おお愛の源よ》

《マニフィカト わが心 主をあがむ》ニ長調

・5月31日（土）日本キリスト教団 荻窪教会（60席）

（JR中央線/地下鉄「荻窪駅」南口8分、杉並区荻窪4-2-10）

・6月7日（土）日本キリスト教団 三崎町教会（250席）

（JR総武線「水道橋駅」東口3分、千代田区神田三崎町1-3-9）

<両日とも同内容、14時開演（開場30分前）>

ソプラノ 藤原優花、ソプラノ 前田ひより、アルト 中島麻紀子

テノール 野中裕太、バス 及川泰生

管弦楽 コレギウム・アルモニア・スペリオール・ジャパン（ARS）

オルガン 田尻明葉、合唱 東京バッハ合唱団

指揮 大村恵美子

◆入場無料（お申し込み不要、直接ご来場ください）

◆後援会/団友のみなさまには、予めご一報いただければ、お席を確保いたします。

◆主催（問い合わせ）：東京バッハ合唱団

電話 03-3290-5731、メール office@bachchor-tokyo.jp

団の活動理念に対する彼の理解にはいささかの不安も感じませんし、彼のバッハ音楽の解釈に対しても篤い信頼を寄せています。

今演奏会後の上演予定、本番指揮者の人選など、目下、構想の最中です。次回公演の曲目は、日本語版楽譜の発行計画にのっとり、すでに版下の準備が整った新規10曲のうちからの2曲に、既刊の名作1、2曲を加えて構成することになるでしょう。

大村恵美子は、カンタータ全192曲の訳詞原稿をすでに完成していますが、今後さらに手を加えつつ、楽譜全集完結に力を注ぎたいと望んでいます。この志、ご支援者のみなさまとご一緒に成就させていただけますよう、お励ましいただければ幸いです。

主宰者の最後の本番指揮となります今回定演、ぜひともお誘いあわせのうえ、ご来場ください。（編集部）

月報 2025年4月号 CONTENTS

- ・ストラスブール便り：頼もしいフランス人（遊馬 栄）p. 2
- ・安曇野閑人氏の随想連載、50回！（大村健二）… p. 3
- ・連載：退屈するのはいそがしい [50]（大野博人）p. 4

頼もしいフランス人

遊馬 栄 (元団員、ストラスブール在住)

大村 恵美子様

今年も復活祭の季節になりました。お元気で充実した日々を送られていることと思います。

*

涙を堪え、最終コーラルを歌い切った「マタイ受難曲」の余韻には何とも言い難い切なさがあります。これは大昔に東京バッハ合唱団で刻まれた、今でも私の中に湧き上がってくる、貴重な感動です。

妻ニコルは、教会とは疎遠であるにもかかわらず、復活祭の礼拝には、絶対参列すると今から気負っています。

普段の礼拝(カトリック、プロテスタント両派とも)では空席が目立つのに、クリスマス、復活祭の礼拝となるとカテドラルの大聖堂が超満員になるような熱、ジュデオ-クリスチャン [Judeo-Christian :ユダヤ教・キリスト教の双方に関連した、編集部注] の伝統・歴史はフランス人の心の中に生き続けているのを感じます。これら二大祭りでは己の信念の原点に戻って再出発を誓うというのが建前ですが、一番の楽しみは、日本の正月のように、久しぶりに家族が集合して定番の料理と美味しいワインを分かち合いながら長い午後のひと時を過ごすことです。

フランス人は政治論争が三度の飯より好きと言うくらいで、このような家族の集まりでは暗黙の了解があり、それを避けるのが常識になっています。

クリスマスには七面鳥、復活祭には子羊の股肉丸焼き Gigot d'agneau というのが定番料理で、アペリティフから始まり、前菜、メイン料理、チーズ、デザートと、違った嗜好のワインを楽しみながら、日本人の昼食観念では想像しがたい、5、6時間という長い昼食時間を過ごします。その間、たわいない話題でも交わしながら淡々と食事を進めていくのかと思いきや、さすが17世紀の雄弁家 Richelieu [リシュリュー] の国だけあって、食卓での何気ない会話でも話術の必要性はそれぞれが心得ています。

*

思いを伝え、相手を説得するには、状況にあった適



切な動詞を選ぶのが肝で、それに合った形容詞で修辞化するというのは高校生の時から習っていることです。

高校卒業のためにバカロレア試験があります。理系文系共通試験としてフランス語と哲学は必須です。過去の哲学の試験に次のような問題がありました：

• Comment être heureux si rien ne dure ? (持続するものは何もないとしたら、如何にして幸せになれるか?)

[1 時間]

• Peut-on parler sans savoir ? (知識なしで話すことができますか?) [1 時間]

• Faut-il se battre pour la vérité ? (真理追求のために戦うべきなのか?) [1 時間]、等々。

フランスの高校生は、誰でも大学に入る前にこのような頭の体操を強いられるような問題に向かって考えられています。他方、日本には「雄弁は銀、沈黙は金」という社会的背景がまだ存続するとすれば、未来に向かっての両者の隔たりは広がるばかりなのかも知れません。違った意見のぶつかり合いが民主主義の礎と信じています。

とは言っても今の世を見渡すと、形だけは“民主的”に選ばれたポピュリストなる者が台頭し、世界の秩序を牛耳り初めています。苦い世界史の中で、「結果を得るためには手段を択ばず」と言ってつまずいたイタリア人哲学者の教訓を思い出すときなのかも知れません。

人間の特権は考えることです。それを錆びつかせてしまうとポピュリズムの目覚めに繋がって行くのは必然的ななのでしょう。

*

フランス人は話好きです。その原動力はフランス人の気質にあると思います。それを育んできたのは、彼らの長い歴史を通して、苦境の中で民が正義を探し続けた彷徨。ローマ皇帝シーザーが紀元前58年に Gaulois ゴロワ族を侵略したころに始まり、20世紀前半のナチスドイツによる占領までの長い激動の歴史、その中で醸成された繊細な語彙でどの言語にも劣らない、どんなポピュリストの扇動にも負けない“強い言葉”になったと思います (信念を持ったフランス人が話す場合ですが……)。

歴史の要所所で雄弁な説教師が現れ、民の沈んだ心に希望を灯し、かれらの瘦せた背中を押して正義への道しるべを照らしながら歴史を作ってきたからではないかと感じます。友人同士でも、家族内でも、行きつけのビストロでも、如何なる話題にしても、何が Juste [ジユスト、正義] で、何が Injuste [アンジユスト、不正義] だと弁明できる賢さ・狡さを“盾”に、鋭いレトリックの矛先を論争相手に向けるのです……。

ほのかな記憶ですが、昔、合唱団の合宿でジルベール・ベコーの「L'important, c'est la rose」[重要なこと、それはバラ]を熱唱したガブさん^(*)のことを思い出します。今考えると彼は典型的なフランス人でした。



[* : 当合唱団の初期のころの団員で、アルザス出身のメランベルジェ・ガブリエル氏。明治学院大の仏文科で教え、宮沢賢治の翻訳や和仏辞典の編纂にも携わった後、帰国しました]

*

バッハ音楽の偽りのない旋律を“矛”にすると、世に蔓延し始めた不協和音が耳障りになってきます。

息苦しい世界秩序の中に入り込んでいますが、日本の美しい自然の中に溶け込み、春のすがすがしさを胸いっぱい吸って幸せを感じ取ってください。

充分にご自愛の上、楽しい有意義な毎日をお過ごしになられることを祈っています。

遊馬 栄 さま

大村 恵美子 (主宰者)

日本の東京でボケーッと過ごしている私に、まさにフランスそのもののような文章が現れて、びっくりしました。

こんなに芯からフランス的なお便りをくださるあなたは、もはやフランス人になりきってしまったかのようです。

日頃の日常生活・仕事描写でありながら、すきのない文章。それに、私などはもうとっくに忘れかけていた「ガブさん」その他の物事の紹介……おみごと!

今後も、あなたのお便りで、私にもさまざまなことを思い出させてください。ありがとう!!



■見開き両ページの写真3点 :
「2025年春のセレクション」千葉光雄 (団員)

「退屈するのはいそがしい」 安曇野閑人・大野博人氏の連載、50回!

大村 健二 (団員、月報編集)

月報4ページ目が定位置の連載随想、「退屈するのはいそがしい」が、めでたく第50回を迎えました。

初回は、なんと4年前、新型コロナが猛威を振るいはじめた春のことでした(2021年3月号、No. 705)。この災禍、日常の在り様にいくらかの変更を加えながら終息を迎えたようですが、気がつけば、世界の情勢はもっと重大な次元で、まったく闇の中に置かれています。

翌2022年の2月末、プーチン(ロシア)のウクライナ侵攻の報に胸を抉られながら、連載13回「雪は降る、あなたは……」(3月号、No. 717)の原稿を読ませていただいたことを覚えています。

2023年10月7日、ハマスの奇襲を受けたイスラエルのネタニヤフは、同日、「自制することなく」パレスチナ人を攻撃せよ、と呼びかけました。

2024年11月、第2期トランプ政権が誕生。世界がメチャクチャになるのでは、という不安を感じた方も多かったと思いますが、その前後に発行された月報で、閑人氏は「相次ぐ憂鬱なニュースに塞ぎがちな私たちの心にも染みる」と、万葉の憶良の歌をあげています(連載46回「鳥にしあらねば」(12月号、No. 750))。

この4年という年月、歴史のなかではどんな総括がなされるのでしょうか。まさか、それを記述する者も読む者も、この世に影も形もない……、などという事態が無いことを祈りましょう。

という具合に、この間、さまざまな出来事に出会いながら、私たちは日常生活を送ってきました。

この連載企画をお願いしたころのメールで、安曇野の空に向かって開いた大きな窓、の機能も期待したいです、のような趣旨をお伝えした記憶がありますが、上に引いた回の憶良の歌、「世の中を憂しとやさしと思へども 飛び立ちかねつ鳥にしあらねば」になぞらえれば、各連載によって、まさに幾度、閑人宅の天窓から私たちの日常の憂さを、飛び立たせていただいたことでしょうか。

ご支障ないかぎり、この「退屈」、まだまだお続けいただけることを願っています。

筆者のご紹介へは、下記HPアドレス上のバックナンバーからお立ちよりください。

<大野氏の、連載以前の当紙へのご寄稿：書評>

・「宮田光雄著『ボンヘッファー 反ナチ抵抗者の生涯と思想』を読んで——時代と向き合うとはどういうことか」

(2019年11月、No. 689) (大村恵美子による当稿への付記<主宰者より>には、大野氏ご夫妻との若き日の一こまも含めたご紹介があります。必読)

<連載第1回の、編集部付記>

・筆者ご紹介 (2021年3月号、No. 705)

<連載随想>

退屈するのはいそがしい [50]

考えない葦

安曇野閑人 大野 博人



仕事が入った。久しぶりのインタビューだ。取材道具の録音機がけっこう古くなっていたので、新しく買い換えようとして驚いた。機能がおそろしく進化しているのだ。

これまで使ってきたICレコーダーだって悪くはなかった。録音した音声データをパソコンに移すこともできた。たとえば、微妙な発言を正確に文字起こすとき、繰り返して聞き直す作業がしやすく、とても便利だと感じていた。

しかし、最新の機器だと、音声データが専用のサイトに送られAIが文字起こしをして返してくる仕組みになっている。日本語だけではない、多くの外国語にも対応できるという。

時代がすっかり変わったと感じた。私が新聞記者になりたての40年あまり前には、取材で録音機を持ち歩くことなどなかった。聞いたことはすべてノートに手書きしていた。ノートはあつという間になぐり書きの文字でいっぱいになった。

それから数年して、小型のカセット・レコーダーが登場して重宝した。とくに外国語で取材するときは、正確を期すために欠かせなくなかった。ただ、英語や仏語に慣れていないころは、1時間ほどのインタビュー記録を何度も聞き直し、すべてを文字起こしするのに徹夜したこともよくあった。

それが、新しいレコーダーを使えば、取材を終えるの間もなく文字になる。それどころではない。レベル

の高い機種だと、取材したり会議で話し合ったりした内容の要約まで生成AIが作ってくれる。さらに、議論の中で足りない点の指摘までするそうだ。

こうした機種を宣伝しているネットの動画を見たら、アナウンサーが「第二の脳です」と紹介していた。自分自身の脳の代わりに記憶したり、記憶したことを呼び戻したりしてくれる。おまけにデータの分析や不足部分の指摘までしてくれる。脳の仕事をアウトソーシングしているというわけだ。

でも、考えることまで下請けに出してしまっているのだろうか。そんな疑問が浮かんだとき、ある本を思い出した。

ユヴァル・ノア・ハラリというイスラエルの歴史家が書いた「Sapiens / A brief history of Humankind」（邦訳「サピエンス全史」）だ。こんなことを指摘していた。

人間の脳の大きさは石器時代の狩猟採集民のころから小さくなってしまった。当時の人々は過酷な環境で生き延びるのに必死だった。天候のわずかな変化や獐猛な獣の気配を察知し、その意味をさぐるため絶えず頭を働かせていた。そのためには、どんなときにどこに危険が潜んでいたか、無数の経験を細部までしっかり頭に入れておかなければならない。けれども、そのうち文字が発明されると、脳は自分でなにかも覚えておく負担から解放された。さらに社会が大きくなり分業システムが拡大していくと、私たちは自分ひとりでたくさんの複雑なことを四六時中考え続けることをしなくてすむようになった。それぞれの専門家に任せればいいからだ――。

たしかに使われなくなった器官はどうぜん退化する。脳だって例外ではあるまい。

記憶することも、要約することも、翻訳することも、問題点を見つけることも、なにかも生成AIにアウトソーシングしてしまったら、脳はますます用済みだ。さらに小さくなくても不思議はない。

「第二の脳」が手に入るなんて喜んでいる場合か。それはつまり「第一の脳」が役立たずになりつつあるということでもあるだろう。

「人間は一本の葦にすぎない。自然の中で最も弱い。しかし、それは考える葦だ」。17世紀フランスの思想家、パスカルは「パンセ」にそう書き残している。「人間をつぶすのに、宇宙が総がかりで武装する必要はない。人間を殺すには、一吹き of 蒸気や一滴の水でも十分だ。だが、宇宙に押しつぶされるとしても、人間は自分を殺そうとする宇宙よりも貴い。なぜなら、人間は自分が死ぬということも、宇宙の方が自分より優位にたっていることも知っているからだ。宇宙はそんなことは知らない。だから、私たちの尊厳は、考えるということにある」

「考える」ということをアウトソーシングしてしまったら、人間は、ただの一本の葦になってしまう。

（団友・後援会員、元朝日新聞記者）



■新しく入手したレコーダー。私が徹夜してやっていた仕事を数分でやってしまう。しゃくにさわる。（写真提供と説明…筆者）